

「未開の諸folkが風紀をもつようになる」

—ヨハン・クリストフ・アーデルングの「folk」概念について

清水 朗

0

「folk（民族／民衆）」という概念はドイツ語史記述において何度も問題化され、様々な方向から説明されてきた。実際、いくつもの接近法（政治的、経済的、社会学的等）がこの概念に関しては十分可能であり、また正当化されるようにも見える。そのため様々な研究領域をカバーする調査は多くの時間を必要とし、当然この小論の範囲を超えてしまう。そのためここで筆者は18世紀後半におけるドイツ語研究において卓越していたJ. Chr. アーデルングにおける「folk」概念に範囲を限り、その際彼以前及び彼以後の他の何人かの文法家や言語思想家についても顧慮することにする。時代的にJ. Chr. ゴットシェートとJ. グリムの間に位置するアーデルングは、ある時には規範文法の完成者として、ある時には来たるべき19世紀と20世紀の言語学への転換点として特徴づけられる。しかし19世紀のドイツ国民国家生成のコンテキストにおけるfolkとの関係がしばしば論議されてきたJ. グリム⁽¹⁾に比べ、この観点におけるアーデルングの立場はむしろ付随的に言及されるか、あるいは前近代的・貴族的なものとの烙印を押されてきた。しかしながら、当時のキーパーソンであるアーデルングをそのような型にはまった枠組みにおいてのみ理解できるのか、という問いが立てられよう。アーデルングを社会的な意味において、よりダイナミックに考察するべきではないだろうか。これがこの論文の問いかけである。

(1) 筆者は以下の論考でこの点について言及した：A. Shimizu, *Philologie und Volk bei Jacob Grimm*, *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, Vol. 42, Tokyo 2001, S. 31-40.

一般に「フォルク」という言葉は様々なコンテキストにおいて、様々な意味合いで用いられるが、それはグリムの『ドイツ語辞典』に当該項目が18段にもわたり記載されている⁽²⁾ことに見るとおりである。筆者は以下にそのうちの二つの意味を具体的な例によって示し、それが言語史のコンテキストにおいて一体何を示唆するのかを考察したい。

1.1

アーデルングが最後の重要な規範文法家であり、彼が主に言語の共時的局面を研究していたとはしばしば強調されることである。その際彼の研究の通時的局面はたびたび忘れられる。アーデルングは歴史学も研究しておりドイツ語の歴史について記述することもまれではなかった。彼の通時的研究における業績は後世のポップ、ラスク、グリムといった歴史言語学者たちのそれと同様に評価することはできないが、そのドイツ語史記述をより詳しく考察すると、彼の歴史解釈は全く前近代的とは言えず、そのために取るに足らないものではないように見えるのである。例えば彼は17世紀の文法家たちのようにバベルの塔の崩壊による言語の分裂を信じてはおらず、そのドイツ語史の時代区分（1. ドイツ諸民族の起源からゲルマン民族大移動まで 2. ゲルマン民族大移動からカール大帝まで 3. カール大帝の統治からシュヴァーベン諸皇帝まで 4. シュヴァーベン諸皇帝から14世紀の中頃まで 5. 14世紀の中頃から宗教改革まで 6. 宗教改革から現代まで⁽³⁾）は言語上の変化よりも社会的変化に基いてはいるものの、それなりに首尾一貫した基礎を欠いている訳ではないのである。いくつかの詳細は今日の歴史理解とは一致しないが、歴史記述の枠組みは全体として真剣に受け止めることができるものである。

そしてこれらの歴史記述においてドイツ人はある時には単数の「フォルク (Volk)⁽⁴⁾」として、ある時は複数の「諸フォルク (Völker)⁽⁵⁾」として現われ、そ

(2) DWG, Bd.12, II. Abteilung, bearbeitet von Rudolf Meisner, Leipzig 1951, Sp. 453-471.

(3) J. Chr. Adelung, Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache, Leipzig 1782, S. 15.

の際それらの語は肯定的な意味合いも否定的な意味合いも持っていないように見える。その意味ではこれらの語は「諸民族 (Völkerschaften)⁽⁶⁾」あるいは「諸種族 (Volksstämme)⁽⁷⁾」と同一視することができる。これらのフォルクは初めは「粗暴 (roh)⁽⁸⁾」で、「教養がなく (ungebildet)⁽⁹⁾」、「野蛮 (barbarisch)⁽¹⁰⁾」であるが、ある時、より高い諸文化などの影響によって文明化され得る：未開の諸フォルクが風紀をもつようになる (Wilde Völker werden gesittet)。ドイツ人がこうして「風紀をもつ」のはどのようにして起こるのだろうか。アーデルングによれば未開の民族が風紀をもつには四種類の仕方が可能である：征服あるいは内的な「充実 (Fülle)」により、そしてそれぞれが周囲の諸民族に対する文化の程度あるいは住民数の関係によりそれは起こるのである⁽¹¹⁾。ドイツ人の場合は第二のケースが起こったのだという。つまり「粗暴でまだ教養のないフォルクが、風紀がありすでに教養のあるフォルクを征服したが、征服された人々が征服した人々よりも多数である (上に文明の程度も高い) 場合にしばしば被征服民により征服者達が影響を受ける。このことはローマ帝国の様々な地方に移住し、ローマの偉大な文明の廃墟に定着した大多数の粗暴なドイツ諸フォルクに当てはまることである⁽¹²⁾」。

このようにして「ドイツ諸フォルク (Deutsche Völker)」は当時のローマの文化により高められ、風紀をもつようになった。いずれにせよ「フォルク」という言葉にはこのくんだりでは特に否定的な響きはない。何故ならばフォルクは「粗暴 (roh)」で「いまだ教養のない (noch ungebildet)」場合もあれば、「風紀があり (gesittet)」、「すでに教養のある (schon gesittet)」場合もあるからである。ここでは「フォルク」という言葉が時に「ナツィオン (Nation)」という言葉と等置

(4) Ebd., S. 38: „Gern hätte er sein Volk so gelehrt und weise gemacht“.

(5) Ebd., S. 16: „aller zwischen dem Rheine und der Weichsel wohnhaften Völker“.

(6) Ebd., S. 15, 73; J. Chr. Adelung, Aelteste Geschichte der Deutschen, Leipzig 1806, S. 276, 311.

(7) Ebd., 73; J. Chr. Adelung, Deutsche Sprachlehre, Berlin 1781, S. 7f.

(8) Ebd., S. 10.

(9) Ebd., S. 318, 323, 339, 388.

(10) Ebd., S. 348, 394.

(11) Vgl. Adelung, Umständliches Lehrgebäude, S. 29f.

(12) Ebd., S. 29.

されていることを指摘しておきたい⁽¹³⁾。フォルクとナツィオーンの関係の問題については後に立ち入ることにする。

1.2

ここまでに見た限りでは、アーデルングにおける「フォルク」とは価値中立的な概念である。そして「フォルク」は諸階級と——アーデルングによって諸階級の低位区分と見做されている——諸身分からなっている⁽¹⁴⁾。この意味をアーデルングは維持しようとしているかに見えるが、しかし注目すべきことに彼はフォルクという言葉と同時代の社会的コンテクストにおいては別の意味、つまりは社会の下層階級を表すためにも用いている。それは彼が上部ザクセン地方——つまりは彼がその言葉をドイツで最も純粋なものとする地方——の下層階級の言葉に言及する箇所を示される。「しかしながら、全帝国にその書き言葉を与えたといわれる幸福な地方もやはりまたその地方的なものを持っているのだと言うことができるだろう。この地方のフォルクは他の地方におけると同様非常に不純で卑しい話し方をするのである。⁽¹⁵⁾」「上部ザクセン地方にはすべての他の地方と同様、いくつもの住民の階級があり、それらはある時には強く、ある時には弱く互いに結びついている。すべての階級、そしてすべての階級においては殆どすべての身分がその固有で独特な状況を持っているので、それらは彼らの言葉にも日常的な影響を及ぼす。この地のフォルクは他の地方におけるほどフォルクの性格は強くないが、全体に比べてみればそれはやはりフォルクなのであり、その言葉はそのため固有の粗削りで粗野なものを持たざるを得ないのである。⁽¹⁶⁾」これらの引用箇所から上部ザクセン地方のいくつかの階級と身分は「フォルク」であり、この「フォルク」は「全体」に対して一つのまとまりをなしていることが見てとれる。上述のように「フォルク」が全体を意味するのであればこれは明らかな矛盾である。何故ならば全体はそれ自身に対し

(13) Vgl. J. Chr. Adelung, Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie, Leipzig 1788, S. 8, 20, 21.

(14) Vgl. Walter Dengler, Johann Christoph Adelungs Sprachkonzeption, Frankfurt a. M./Berlin/Bern/Bruxelles/New York/Oxford/Wien 2003, S.116f.

(15) J. Chr. Adelung, Über den Deutschen Styl, Bd. 2, Berlin 1789, S. 54.

(16) Ebd., S. 55.

て対照をなすことができないからである。

「folk」の第二の意味合いは、アーデルングが上部ザクセン地方の「上流階級」の言葉を理想的なドイツ語と見做していたことから明らかになる。つまり「低俗さ」である。アーデルングはすべての低俗なものを「卑賤なもの (Pöbelhafte)」として軽蔑し、彼の辞書⁽¹⁷⁾からfolkに特徴的な言葉を除外するか悪しきものとして符号をつけるように試みた。彼に従えば「趣味、言葉と慣習に関して住民は二つの部分、つまり上流階級と下層階級に分けられる⁽¹⁸⁾」のであり、第二の意味の「folk」は「下層階級」のことなのである。

1.3

「folk」という言葉の二つの用法——一方では歴史的記述における中立的な用法と他方では同時代の社会的コンテクストにおける対象を貶める用法——はどのように調和させることができるのだろうか。あるいはこの二つは互いに全く独立して用いられているのだろうか。アーデルング自身はもちろんこの意味の違いには意識的であり全体として二つの意味を区別している。彼の辞書ではまず最初に「一つの集合体 [...], 特に生物の不定の群れや多数⁽¹⁹⁾」が示される。その中で動物や兵士などと並び「ナツィオンやfolkの下層の部分⁽²⁰⁾」が挙げられ、それは上述の第二の意味に該当する。次に「様々な人々からなる全体、しかしその狭い意味におけるもの、つまりは共通の先祖を持ち、共通の言語によって結ばれている⁽²¹⁾」者達が挙げられる。これは上述の第一の意味に該当するだろうが、ここに引用された箇所アーデルングは付け加えている:「この言葉のこの意味は時代遅れとは言えないものの、外国語の『ナツィオン』が導入されて以来、通常の言語の使用においてはよりまれになった。[...] 近年では『folk』という言葉は最も頻繁に

(17) Vgl. J. Chr. Adelung, Grammatisches-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, Bd. I, Leipzig 1793, S. III f.

(18) Adelung, Über den Deutschen Styl, S. 55.

(19) Adelung, Grammatisches-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, Bd. IV, Leipzig 1801, Sp. 1224f.

(20) Ebd., Sp. 1225.

(21) Ebd.

は古い諸民族について用いられる。[...] より新しい民族については一部では Nation、一部では Völkerschaft という言葉がむしろ普通用いられるが、多分これは『フォルク』という言葉に非常に多くの場合に付随した軽蔑的な意味合いのためであろう⁽²²⁾。つまりは第一の、中立的な意味でのフォルクは Völkerschaft あるいは外国語の Nation に置き換えられる傾向があり、それはフォルクに付随する「軽蔑的な意味合い」のためなのである。このことによりフォルクという言葉は主に歴史的なコンテキストで、「古い諸民族」を表すために使われることになる。それにもかかわらず、この言葉の中立的な意味での使用はまれになるものの、時々使用され続けるのである。その反面、「軽蔑的な」意味合いは歴史的なコンテキストにおいても認められるのかを今問うことができる。

1.4

以上のことを要約し、必要であれば疑問も出す。

I) 「フォルク」という言葉をアーデルングは古い、歴史的なコンテキストにおいては中立的に用いているように見える。しかしながら否定的な意味合いが場合によっては含まれてはいないだろうか。II) 同時代に関わるコンテキストではこの言葉はしばしば社会の下層階級という意味で用いられ、それに対し中立的な意味ではしばしば Nation や Völkerschaft という表現によって置き換えられている。しかしながらフォルクという言葉が中立的な意味で用いられることもある。

2

以下でこの二つの点にさらに立ち入ることとする。

2.1

Iに関して：「フォルク」が「粗暴 (roh)」あるいは「風紀をもつ (gesittet)」ことがあるにせよ、この言葉は大多数の場合否定的な形容をされる：「全く教養のない諸フォルク (lauter ungebildeten Völkern)⁽²³⁾」、「非常に粗暴で教養のないフォ

(22) Ebd., Sp. 1225f.

ルク (ein sehr rohes und ungebildetes Volk)⁽²⁴⁾、「すべての教養のない諸folk (alle ungebildete Völker)⁽²⁵⁾」、「教養のない諸folk (ungebildete Völker)⁽²⁶⁾」、「野蛮な諸folk (barbarische Völker)⁽²⁷⁾」、「未開のfolk (ein wildes Volk)⁽²⁸⁾」、「非常に粗暴で感性的なfolk (einem ganz rohe und sinnlichen Volke)⁽²⁹⁾」等々。用例の数だけでは決定的なことを証明できないが、しかしながら一定の傾向を示すことはできる。この点に関し W. デングラーは述べている：「ある個所でアーデルングは観念的ではあるが大胆な下層の諸力 (der unteren Kräfte) の顕在化された心理的現象と自身のfolk概念との並置を行っている：『[…] 何故ならばfolkは下層の諸力に従って行動し、そのために方向づけられ導かれるからである』⁽³⁰⁾。デングラーが正しいのであれば、アーデルングは古い歴史的なコンテクストにおいても「folk」を軽蔑的に用いていることになる。その場合はそのようなfolkの反対概念は「狭義の市民社会⁽³¹⁾」であろう。このことに関連し、Völkerschaft という言葉も「野蛮な諸民族 (barbarische Völkerschaften)⁽³²⁾」のように時折否定的な形容詞とともに現れるが、Nation は決してそうではないことを示唆しておく。この限りにおいて「未開の諸folkが風紀をもつようになる (Wilde Völker werden gesittet)」のような表現における「諸folk (Völker)」も必ずしも価値中立的に理解されるべきではないと考えるべきなのである。

(23) Adelung, Aelteste Geschichte der Deutschen, S. 6.

(24) Ebd., S. 318.

(25) Ebd., S. 323.

(26) Ebd., S. 339f, 338.

(27) Ebd., S. 394f.

(28) Adelung, Umständliches Lehrgebäude, S. 29.

(29) Adelung, Deutsche Sprachlehre, unpaginiert.

(30) Dengler, a.a.O. S. 119.

(31) Adelung, Umständliches Lehrgebäude, S. 29; vgl. Adelung, Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie, S. 13.

(32) Adelung, Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie, S. 24.

2.2

II に関して：ここで、なぜアーデルングが同時代に関するフォルクという言葉に対し、しばしば軽蔑的な意味を付与しているのかを考えてみる。特に彼の辞書の前書きにおいて否定的な意味が前面に押し出されている：「このため古い、すべての地方的な、そしてすべての下品で、フォルクのみに特徴的な言葉と表現は規則に従いこの辞書には掲載されないことになる。⁽³³⁾」「下品なフォルクのすべての特徴をこの種の作品において必須と考える者にとっては、この作品の分量の半分に分、いやそれどころかそれ以上増やすことが容易にできるだろう。⁽³⁴⁾」上述のように、アーデルングは上部ザクセン地方における「上流階級の」言葉を理想的なドイツ語と見做していた。しかしこのことを考慮したとしても、彼の「下品なフォルク」へのこれほどの拒絶感は奇妙で、説明を必要とする。彼が何故こうした態度をとるようになったのかを問わざるを得ないのである。

その主な理由は、当時の文学における傾向にあるように筆者には思われる。知られるように、1740年と1760年の間の文学に何よりもドイツ語の言語的頂点を見ていたアーデルングにとって⁽³⁵⁾、1760年以後の作家達の目標と表現形式は「言語の統一と趣味への違反⁽³⁶⁾」以外の何物でもなかった。新世代の代表者としてはレッシング、ヴィーラントとクロップシュトックを挙げることができるが、彼らはゴットシェート流の規範に縛られた文学の形式に反して、内容的にも言語的にもより新しく、より自由な形態を手に入れるよう努めていた。標準語（Hochsprache）に関してヴィーラントは四つの「言語の領域」を区別する：1) より高い演説家や詩人の言葉、2) 滑稽な言葉、3) 学問と芸術の言葉、4) 上流階級の日常の社交語、がそれであり、慎み深さを害するものを除けば、すべての言葉はある意味で最上のものであると言う⁽³⁷⁾。ここでは、ヴィーラントにおける標準語は地域的、階級的、

(33) Adelung, Grammatisches-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart, Bd. I. Leipzig 1793, S. III.

(34) Ebd., S. IV.

(35) Vgl. Dieter Nerius, Untersuchungen zur Herausbildung einer nationalen Norm der deutschen Literatursprache im 18. Jahrhundert, Halle 1967, S. 68.

(36) Ebd.

(37) Vgl. Gotthard Lorchner, „... daß es die guten Schriftsteller sind, welche die wahre Schriftsprache eines Volkes bilden“. Zur sprachgeschichtlichen Bedeutsamkeit der

発話場面的等の様々な観点においてアーデルングよりもずっと広く捉えられているのを見ることができる。18世紀後半においては「読者」の数が増え、そのことにより言語・コミュニケーション上の要求の全く新しい属性が生じたのである⁽³⁸⁾。そのことをヴィーラントは意識していた。

アーデルングの目にこれらの作家達よりもさらに危険に映ったのがシュトゥム・ウント・ドラングの詩人達であった。彼らの中にアーデルングは統一語にとっての大きな危険を見ていた。これらの詩人たちは好んで民衆語的な表現を用いたが、それはアーデルングを極度に不快にした。1775年に彼は書いている：「今日ではこの点（つまりは良い趣味と上品な書き方の保護）に厳格になることがより必要となっている。何故ならばいわゆる天才達が下品な賤民の言葉を詩歌の言葉にしようと躍起になっているからである。⁽³⁹⁾」彼は激怒して同時代の詩人たちが「下品な賤民（des niedrigen Pöbels）」の言葉を使うことを非難している。このようにアーデルングはこれらの作家たちのこの新たな民衆主義から断固として距離を置き、「賤民的な」表現や卑俗な言い回しを避けようとする。このことは当然下層階級とそのフォルクの言葉使いを貶めることにつながる。

フォルクという言葉が何故同時代的なコンテキストにおいてしばしば否定的な意味を持つのかを上に示した。その際アーデルングの同時代（とりわけシュトゥム・ウント・ドラング）の作家達に対する態度が大きな役割を果たしていることが判明した。ここでは逆にフォルクという言葉がどのような理由で中立的な意味でも用いられ、必ずしも外来語のナツィオンに置き換えられるばかりではないのかを考えてみよう。この意味で、中立的な意味での「フォルク」がしばしば「言語（Sprache）」と結びついて使われることは興味深い：「同じ由来を持ち一つの観念を一つの音により、一つの仕方で表現する人々が、フォルクあるいはナツィオンと呼ばれるのであり、その限りにおいて言語とはあるフォルクがそれによりその観念を通常伝える知覚可能な音の総体なのである。そのような言語はこのフォルクに

Auseinandersetzung zwischen Wieland und Adelung. In: Werner Bahner (Hrsg.), Sprache und Kulturentwicklung im Blickfeld der deutschen Spätaufklärung. Der Beitrag Johann Christoph Adelungs, S. 112.

(38) Vgl. ebd., S. 114.

(39) ネリウスによる引用。a.a.O. S. 69.

属する者の母語 (Muttersprache) と呼ばれるのだ。(40) あるいは「言語は Folk を区別する最も重要なメルクマールである。風俗や、習慣、宗教すらが変わってもそれは同じ Folk であり続けるが、別の言語を与えてみなさい。するとすべてが変わってしまうのだ。(41) これらの引用から、「Folk」はアーデルングによって、その言語により定義され決定されることがわかる。彼はこの関係を簡潔にまとめている：「諸 Folk は誕生し、変化し、没落する。言語もまたしかりである。(42) これは平凡な意味で、民族も言語も同様に誕生し、変化し、没落することを意味するのではなく、両者がただ関係しあっているのみ生きているのだということの意味しているのである(43)。

言語と Folk の関係に関して言えば、言語と詩と Volksgeist (民族精神) の間に内的関連を見たヘルダーを思い出すべきであろう。彼は言語が土地とその言語の話者の生活とともに変化し、特有の仕方発展すると確信していた。アーデルングはヘルダーのこの考え、特に『言語起源論』に深い影響を受けた。そして人間の理性を絶対視し、言語の価値をそれがどこまですべての人間に共通した理性の認識を可能にするかで測ろうとした彼の先駆者ゴットシェートを批判する。ヘルダーの影響を受けたアーデルングにとっては理性と言語は互いに依存し、理性は言語の発展とともに進化するのである。

実際ここには言語と Volk (sgeist) (民族 [精神]) との間のはっきりとした関係を見ることができる。ヘルダーとアーデルングの考えによれば、理性すらも言語のように土地とその生活様式の相違に従って多様であり得るのだ。土地はその生活様式とともに Folk を形成する。そこから言語と Folk の分かち難い関係が生じ、この二つは同じコインの両面であることがわかるのである。

アーデルングによれば言語はそれが話される土地と生活様式に影響され、最初から存在する理性によって導かれるのではないため、言語はそれ自身、つまり話者の意図なしに発展する。そのため文法家は言語をそれがあのままに記述するべきで、可能性としてあり得たり、文法家の願望によればそうであるべきものとして記述す

(40) Adlung, Deutsche Sprachlehre, S. 3f.

(41) Adlung, Umständliches Lehrgebäude, S. 5.

(42) Adlung, Deutsche Sprachlehre, S. 4.

(43) Vgl. Dengler, a.a.O. S. 86.

るべきではない。ここには、19世紀に普及する、言語を有機体として捉える発想の芽を見出すことができ、そのみか規範文法から記述文法への転換点を認めることができる。

「言語」との関係で「folk」という言葉の中立的あるいは肯定的な意味での用法を考察したが、その際ヘルダーの言語理解との関係が明らかとなった。ヘルダーの理解におけるfolkのこの肯定的な局面と学識者の立場から見られた否定的な局面がアーデルングのテキストにおいては時折衝突することになる。

今日ではしばしばアーデルングがヘルダーの「言語—folk」の関係をヘルダーの他の言語学的概念とともに受容し、来たるべき歴史言語学および記述言語学への橋渡しを行ったという意味で、その過渡的性格が主張される。他方でアーデルングは相変わらず規範文法の完成者として語られる。ここに示された考察により言えることは、folkという言葉の二つの意味の衝突は、アーデルングの言語思考が終着点であり過渡地点である場所で生じるのだということである。

3

この論文においてはアーデルングのfolkという言葉の使用法をまず初めに古い歴史的コンテキストと、次に同時代のコンテキストに分けて考察した。

歴史的コンテキストにおいては、folkという言葉は大抵の場合中立的に用いられ、Völkerschaft や Volksstamm といった言葉に置き換え可能であることが明らかになった。しかしこの言葉はしばしば「未開な (wild)」、「教養のない (ungebildet)」、「野蛮な (barbarisch)」等の形容詞により修飾され、見たところ否定的な色合いを帯びていることが多かった。

同時代のコンテキストにおいては、folkという言葉の二つの明らかに異なる使用法が見出された。それは一方においては社会の下層の人々を意味し、明らかに否定的な表徴を示していた。ドイツ語の理想像をアーデルングは上部ザクセン地方の「上流階級」の言葉に見ており、その際彼は——それがどの地方で用いられるにせよ——「賤民的な」表現を忌み嫌っていたのである。そのためシュトゥルム・ウント・ドラングの詩人たちの言葉は彼にとって恐るべきものであった。ここにはアーデルングの規範文法家のキーパーソンとしての姿がある。他方ではこの言葉は

「言語」との関係において用いられる。同じ言語を話す者達が一つのフォルクなのである。この「フォルク＝言語共同体」の図式は、アーデルングに深い影響を与えたヘルダーに由来するものである。言語はそれ自身で発展するというヘルダーの考え方はアーデルングを言語観察の新しい段階へともたらした。そのことによってアーデルングは来たるべき 19 世紀とそれどころか 20 世紀の言語学への移行を示していたのだ。

※本論文は筆者による „Wilde Völker werden gesittet“—Zu Johann Christoph Adelungs Begriff „Volk“—, Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences, Vol. 45, December 2004, S. 21-28 を翻訳した上加筆訂正を加えたものである。これにより本論がより多くの読者の目にとまることを願った。